石川達三

# 流れゆく日々

II

新潮社版

流れゆく日々 Ⅱ

昭和四十七年十一月二十五日 印刷
昭和四十七年十一月三十日 発行

定価五五〇円

著者 石川達三
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(二六〇)二二一番(大代)
振替 東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷・二光印刷株式会社 製本・大口製本所
© 1972 Tatsuzo Ishikawa Printed in Japan

# 流れゆく日々　Ⅱ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（昭和四十六年）

□六月十八日（金）晴

二時半から文芸家協会で打合せ。三時からブック・クラブ側と会合。昨年の両者協定に引きつづき次の一年間の協定を結ぶための談合をする。先方の重役二名は即答せず、追て何分の回答をするという態度であった。要は同クラブ出版物の印税について、昨年は七％を認めたが、あと一年は据え置き。明年八月からは通常通り一〇％に戻すというこちらの要望である。

次いで四時から出版契約書改訂についての打合せ。協会側の草案はほぼまとまったが、書籍出版協会がいろいろ註文を出して来るのではないかと思われる。いずれにしても日本に於ける出版の現状はまことに無秩序、未発達というほかはない。著作者の意識もいい加減だし出版業者の慣行もでたらめである。しかし慣行というものは強いので、目下のところは或る程度の妥協が必要らしい。

夕刻から街に出て井上靖君と食事を共にしながら歓談。美術論など。

雑誌「自由」に関嘉彦という人が私のいろいろな随想について評論を書いている。断片的な私の所感は相互に矛盾することもあり、不備なところも少くない。つまりは非論理的で直感的な作

家の所説であるが、同氏はその矛盾を指摘しながら、賛否なかばするような評価を与えられている。同時に私信があって、反論を書く気があるならば「自由」誌上にスペースを取れるように話をして置くという、懇切な文章であった。

反論を書けば自己弁護の強弁になるだろう。私は指摘された矛盾を反省しながら、一貫性に欠けている自分をふりかえり、そのくせ特に切実に一貫性を持ちたいとも考えていない。矛盾したままの自分を肯定するのは怠惰であるかも知れないが、矛盾している方が当り前なような気もする。

関氏に礼状を書き、近刊の文庫本を一冊添えて送る。

□六月十九日（土）曇

毎日新聞日曜版の原稿をわたす。十五回目。一週間を一つの単位として、階段を踏み昇って行くような感じである。一年分、総計五十二段。まだ三分ノ一にもならない。

銀座兜屋画廊へ立ち寄り、展覧会を見る。その後、先日個展を開いた村上肥出夫君などと雑談。同君は雑談しながら油絵を描いていた。その絵具の使い方、パレット・ナイフの使い方を見ていて、彼の絵の秘密が少しわかったような気がした。作者の最大の苦心は制作の過程にある。過程を見なくては出来あがったものの本当の価値はわからないのではないか、という気がした。

夕刻までデッサン会。八時、酒場Sに立ち寄る。開高健、江藤淳、安岡章太郎の諸君がどやどやとはいって来て、笑い、歌い、飲み、何とも楽しそうであった。彼等の若さを羨む。

□六月二十一日（月）雨

文芸誌「海」臨時増刊号が加納典明という人の猥褻小説をのせている。中央公論社という古く格式の高い出版社が、なぜこんな猥褻な作品を掲載したのか。単なる商魂であろうか。それとも現代の世相を背景として、刑法第百七十五条猥褻文書販売の罪に、公然挑戦を試みたものであろうか。挑戦と言えば勇敢にきこえるが、実は司法当局が百七十五条の適用についてはひどく臆病になっているという事情を見越し、相手の足もとにつけこんで、まるで落武者から鎧を剝ぎ取ろうとする野武士のような狡猾さを、私は感じた。これで司法当局が発売禁止、告発という手段に出たら、編集局は受けて立ち、世界中が猥褻文書図画類を公開しているという事実を楯にとって当局と争おうというつもりかも知れない。争えば一般世間がみな味方についてくれるものと計算しているのであろう。

しかしこの作品題名は四字のうちの二字が伏字である。題名には伏字を入れておいて、内容は明らさまな表現を用いている事にも一種の卑怯さがある。編集者は（新鋭カメラマンの第一作、文字で表現したポルノの奥に潜む華麗なる空しさ）という変な註釈を付けているが、編集者が真に猥褻小説を以て刑法に挑戦しようとするのであれば、何の為にカメラマンに小説を書かせる必要があるのか。猥褻作品を書きたがっている本職の作家はいくらでも居る。わざとカメラマンに書かせたという事にも編集者の意図に何か（逆櫓の構え）のような卑怯なものがあることを私は感じる。

裸体写真は週刊誌の流行とともに、その道のカメラマンの数は少くない。しかし私はその方のカメラマンの殆んど全部を軽蔑している。彼等はちかごろ芸術家を気取ってはいるが、その作品の大部分は芸術からははるかに遠い、単なる煽情的写真に過ぎない。加納典明氏の写真について私は何も知らないが、この小説（？）がカメラマン加納氏の制作の基本的な態度を現わしている

のではないかと思う。刑法百七十五条に挑戦しようという本当の意図があるのならば、「海」編集者はもっと作品を厳選し、賛否は別として、誰しもが一応はその作品の意義を感じ得るような、立派な文芸作品を掲載すべきであったろうと私は思う。

ずっと以前に北欧の作家クヌウト・ハムスンがノーベル賞を受けたと私は記憶している。彼の代表作「飢え」には飢餓の心理が細描されていたが、私は一読して何の興味をも感じなかった。食慾は本能であって、それ自体は単純明快、何の芸術性をも持っていない。

現に今日、世界文学全集のどこにも「飢え」は入れられていない。つまり文学作品として見捨てられ、消滅してしまった小説である。

「海」の編集者はこの加納氏の作品…（私は題名をここに書きたくない。この題名によって作者が、どんなに芸術的に無神経な男かということがおのずから明白になっている）…によって、猥褻も芸術であるとか、これは真実であって猥褻と呼ぶべきものではないとか、いろいろな理窟を用意していることだろうとは思うが、この作品に書かれているものはただ本能的な性衝動と肉体的な性感覚だけである。それは一見魅力的である。しかし白昼の街頭に全裸の女があれば万人ことごとく眼をひかれる、それと同質の魅力であって、芸術的魅力とは全く異質のものである。裸女の写真はそれが下等であればあるほど、万人の眼をひく。加納氏の作品の下等さを武器にして刑法に挑戦しようとするが如き編集者の態度をも、私は下等ではないかと思う。

いつも言うように、私は言論表現の自由という事については、私なりに深い関心をもっている。社会人の基本的な自由を守るためには命を賭けても闘うべきものであるが、このような作品を書いて発表して売ってもうける事の自由などは、私は要らないと思っている。これもまた明らかに自由の中ではある。しかしその自由が一般世間にどのような利益をもたらし、人間の生活にどれ

ほどの幸福をもたらすか。

本能を刺戟される快感、そういうひそかな内密な娯楽ではあり得るだろうが、またそれを私は全面的に否定しようとは思わないが、刑法が敗退してこの種の煽情的な娯楽が世間を風靡したとき、道徳、社会秩序、教育秩序なども刑法といっしょに崩壊して行くに違いない。もしもそこまで行ったら、自由はもはや自由というものではなくて、もっと悪質なものに変化して行く。「海」の編集者はそういう風な疑問まで考えたであろうか。編集出版の自由とは別のことであり、ジャナリズムの社会的責任について検討されなくてはならない問題である。私は戦争中から言論表現の自由を言い続けてきたが、それはこんな風な猥褻への自由までも守るためではなかった。猥褻もまた真実だという人は少くない。しかしその猥褻から先に何が有るか。何の発展があり、何の希望があるのか。本能は、それ自体が行き詰りである。文学はもっとほかに、書くべきことがたくさん有るはずだ。

□六月二十三日（水）晴

尾長と椋鳥とが急に殖えた。毎日庭へやって来る。雉鳩もふえたようだ。野鳥が少くなったという説とは逆のようである。四十雀や鵯は九月から以後に姿を見せる山の鳥であるが、今年はどういう訳か鵯がこのあたりに定住していて、しきりに高音を張り、枇杷の実を食べに来る。人間の食物に季節感がなくなって来たが、野鳥にまで季節がなくなって来たようである。

毎日新聞社H君とF君来訪。雑談四十分。実業界の不況が新聞界にも影響して来たらしい様子。朝日新聞社出版局は深刻な内紛に苦しんでいるらしい話、等々。

午後四時浜野君来訪。満洲関係の資料の相談、その他雑談一時間。庭の紫苑の株を掘って進呈

する。

芥川賞候補作品をまだ一つも読んでいない。どの作品も長いので、読む前から気が重い。リアリズムという事について、若い作家たちの間にもしかしたら誤解があるかも知れないという気がする。作家が描いた克明な描写が、読者の頭にそのままリアルな印象を与えるとは限らない。読者は読みながら自分のイメージを思い描く。作家の描写は読者のための手がかりであるべきで、それ以上であってはならない。つまり作者の描写が作者ひとりの我儘な描写であったとすれば、効果は逆になって、読者が思いえがくイメージの邪魔をすることになることも有り得る。

素描は筆を省略した描写である。描かれていない部分は見る人の創造的鑑賞にまかせられている。小説にも技術的には同様のことが為され得るし、為されなくてはならない。そしてその方が一層リアルな印象を読者に与えることができる。俳句や短歌という短詩形式は最も効果的に省略法を用いたものである。省略の効果によって読者はリアルな感銘を受ける。作家もまたリアリズムの為の省略を考えて置かなくてはならない。

ところが近年の芥川賞候補作品は一般に冗長なものが多く、冗漫な描写が多い。候補作品に限らず、青年作家の一般的傾向であろうかと思う。それはリアリズムに似ていて却ってリアルな効果はうすれている。独りよがりのリアリズム、とでも言うべきものであろうか。芥川の短篇、モーパッサン、プーシュキン、アナトオル・フランスなどの短篇をもう一度考え直すべきである。

□六月二十五日（金）晴

アメリカで国家機密が新聞に発表されたという事件は、いささか溜飲の下る思いがする。戦争



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の非倫理性などという用語があったが、戦争に倫理性が有ったためしは有るまい。国家とは如何にして、どのような犯罪を重ねて来たものであるか、この際改めて考えて見る方がいい。但し、日本政府だって何をやって来たか解りはしない。アメリカの事件は主としてヴェトナムに於ける犯罪行為の暴露であるが、政権の座にある者は自国の人民に対しても、どんな事をやって来たか、吾々は何も知らないでいるというだけの事だ。これを言論表現の問題にしてはいけない。それ以前の、国家とは何か、政治とは何かという問題である。

老作家K氏の夫人が万引で捕まったという新聞記事を見た。この夫人に会ったことはないが、週刊誌の座談会などを読んで、何かしら腹立たしく、恥知らずな女だと思っていた。K氏は晩年に至ってこの不名誉に遭ったこと、いかにも気の毒であるが、そういう女性を後妻に選んだということから、身をかわす訳には行かない。

人間社会がはじまって以来、今日ほど猥褻な時代はなかった。遠い昔に於ても、猥褻な時代は幾度かあった。どこの国にもあった。しかし猥褻をひけらかし、宣伝し、猥褻を正当化し、恰もそれが正義であるかの如くに取り扱った時代は一度もなかったのではないかと思う。現代のこのような現象は、人類崩壊の前兆ではないかという風にも考えられる。

□六月二十六日（土）曇

月光荘画廊で現代ソビエト絵画展を見る。あの時代からどのくらい変ったろうか、というのが見る前の楽しみであった。しかし十八年を経て、たいして変ってはいない。ほとんど技術的な研究にとどまっていて、表現の本質的なものには踏み込んで行こうとしていない。フルシチョフが

抽象絵画を見て、驢馬の尻尾で描いた絵だと評した、その害毒は現代まで続いている。
数十点の油絵はほとんどが風景。静物が少しあるばかり。人物は皆無。その風景は忠実な写実が大部分であって、ヨーロッパに比べて五十年遅れている。つまりは画家の仕事も身の安全が第一ということである。絵画にして然り。文学はもっと厳しく、身の安全を考えずには居られないだろう。作家は砲兵でなくてはならぬとフルシチョフが言った、あの言葉はまだ取り消されてはいないだろうと思う。
中国の現代絵画については殆んど知らないけれども、察するにソ連邦と軌を一にしたようなものがあるのではなかろうか。共産主義政府の下で、文学美術が育つ日は決して来ないだろうという気がする。
竹林会デッサン会。今日は七人。終って小説新潮丸山君引退の激励パーティに出る。

□六月二十七日（日）晴
十時出発、都営小平霊園へ行く。継母せい歿後満五年の墓参。花屋へ寄って故人が好きだった百合を買って行く。
このような墓参にどれだけの意味があるものか。人によって考え方はいろいろであろうが、故人の三年、七年、十五年という風に、時をへだてて法事をおこない、あるいは墓参をする時には、一家眷族が一堂に集ることになる。その事の方にも意義がある。故人が、生き残っている眷族を引き逢わせるという役目を果たす。各々家庭をもち、幼少な家族をもち、互に疎遠になりつつある兄弟姉妹が、法事や墓参のために何年ぶりかで相見る、相語るという、その事のためにこそ、墓参は意味があるのではないかという気がした。

午後二時すぎ帰宅。芥川賞候補作品「万徳幽霊奇譚」を読む。これはむしろ直木賞の候補に廻すべきではなかったかと思う。作者は金石範という朝鮮の人。筆は達者であるが、達者さにまかせて書き飛ばしたようなところがある。一応は面白いが、何も心に残らない。

参議院選挙の日。私は行かないときめていたから、行かなかった。選挙の義務をみずから拒否し、権利を抛棄して、自分では何かさっぱりした気持だった。しかし私はむしろ行くことをすすめたのであるが、妻も、息子までも投票に行かなかった。おやじに義理を立てるような連中ではない。彼等にも何かしら行きたくない気持があったのであろうか。その事にも問題がある。

□六月二十八日（月）曇

蒸し暑い日。朝六時半から三十分の散歩。夜七時雷雨約二十分。梅雨の明けにしては少し早い。

大久保清という男、群馬県を中心に若い娘たちを次々と殺して埋めている。第三人目の娘の死体が掘り出された。まだ三四人は殺されている様子。死刑廃止論者に訊いて見たい。この男の犯罪と処罰とについて、ヒュマニズムを考慮する余地があるだろうか。死刑以外のどのような刑罰が適当であろうか。

今日は朝から開票速報のテレビが続いている。市川房枝落選。望月優子、田英夫当選。投票者は女の方が多く、候補者は女の市民にむかって演説をしている。世の中が何もかも女の好みに合わせて動いて行くような形勢である。民主政治の名のもとに、巨大な不合理が社会を支配し始めたらしい。いずれどこかで破綻がくるだろう。

芥川賞候補作品、「はにわの子たち」畑山博君を読む。精薄児の収容施設を扱った短篇で、素材はまことに異色あるものだが、何かしら全体に中途半端で、まとまりが無いし奥行きもない。結局一つの風景を描写したようなかたちで終っており、（僕）という語り手も芳枝という看護婦も朝鮮人の園長も、登場人物として読者が興味を持てる所まで描き出されてはいない。異常な事件が次々と起って来るが、その事件もまた読者の心に滲みこむ前に流れ去ってしまって、印象があとに残らないというところが、最大の弱点ではなかろうかと思った。

□六月二十九日（火）曇、小雨

毎日新聞夕刊に竹内良知氏が「二人の旅人」という短文を書いている。それによると八十年前に陸羯南は当時の進歩主義や自由主義が、（私的自由の主張にとどまっていて、人間の真の自由を実現しない）ことを批判している由。わが意を得たような気がした。私はかねがね瑣末な自由の要求が社会をみだし、却って真の自由を見失うに至るだろうと主張して来たが、先覚者は八十年も前に既にそれを説いていたらしい。自由という考え方は絶えずそのような危険な道を歩いて来たものであろうか。しかも戦後の社会は急速に悪い方に向って傾斜して行きつつある。羯南の警世の言論も、その力は弱かったというより仕方がない。いずれ近いうちに、自由が命とりになって、社会は大きな混乱におちいるだろうという気がする。

「群像」七月号に高橋和巳の夫人和子氏が良人の思い出を書いている。私は痛烈とも悲惨とも言いようのない気持で、わずか四頁のこの手記を読んだ。近ごろ、作家として外部からはこれほど惜しまれた人は少かったと思う。しかし裏側から見ていた高橋夫人にしてみれば、この上もなく

憫れな自閉症患者であったらしい。

私は彼の作品をたくさんは読んでいないが、まことに楽しくない小説、暗澹たる小説、美しくない小説であった。真実は有ったかも知れない。しかし豊かさはなかった。美しい感動はなかった。その秘密は、怨みと悲しみとに充ちた未亡人の手記を読んで全部わかったような気がした。病弱な、精神病者の文学——と言ってしまってはいけないかも知れないが、それに近いものがあった。そして、そのような高橋君の作品が、なぜ多くの若い読者をひきつけたのか。なぜ青山斎場に長蛇の列ができるほど弔問の人が多かったのか。それは作者と同じような病める心が、現代の青年層の中に充満していることの証拠であったかも知れない。

性の解放は当然のことながら、愛の姿に変化を及ぼすだろう。性が自由解放されれば、愛の拘束力、愛の厳しさは最小限にすくなくなり、愛情もまた無責任な享楽的なものに傾いて行く。愛に厳しさなどは要らないという説もあるに違いないが、厳しさ、拘束する力をもった愛と、享楽的な愛とでは、同じ愛とは言っても次元が違う。享楽的な愛は精神性が乏しくて、性愛的なもの、動物的な愛に近づく。それでもいいというのは、安易で怠惰な生き方を望む人たちであろう。現代の若者たちは何事につけても、安易な道をえらびたがる。そして生き甲斐がないと言っている。安易な道ばかり歩いていて、生き甲斐が見出せるはずはないのだ。

□六月三十日（水）晴

梅雨の晴れ間、ゴルフに行く。P・G・A会。参加十八九人。私は四十一、四十二、合計八十三で二等になる。四時過ぎ帰宅。

夕刊の記事。ソ連のソユーズ宇宙船が二十五日ぶりに着陸。開けて見たら三人とも死んでいたと言う。私は天罰だという気がした。

宇宙への挑戦だの天体旅行だの、智恵と技術とに贅って、人間に許された生活の場から外へ出ようと試みた事に対する、宇宙からの痛烈な復讐ではなかったかと思う。人間はそこまで為すべきであったか、為さねばならなかったか。

私は死んだ三人の宇宙飛行士をこの上もなく憫れに思う。狭い宇宙船のなかに幽閉されること二十五日。自由な呼吸もできず、自由に手足を伸ばすこともできず、しかも絶えず死の恐怖にさらされていた。これほど惨酷な地獄はいまだ嘗て無かった。その地獄を造ったのはソ連の科学者たちであった。科学が地獄をつくる。私は月着陸を科学者の偉業だと思う。しかし決して賛成はしない。宇宙旅行は凄惨なドラマである。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com